

専任教員教育研究業績

平成29年4月3日記入

氏名	ふりがな	所属学科	職 位	性 別
崎浜 聡	さきはま さとし	保育学科 通信教育課程	講師	男

小田原短期大学における担当科目名

保育者論、教育実習、教育実習指導

学 歴

和暦(西暦)年 月	事 項	学位
平成 8(1996)年 4月	明星大学人文学部 心理・教育学科 入学	
平成 12(2000)年 3月	明星大学人文学部 心理・教育学科 卒業	学士(教育学)
平成 20(2008)年 4月	香川大学大学院 教育学研究科(修士課程) 入学	
平成 22(2010)年 3月	香川大学大学院 教育学研究科(修士課程) 修了	修士(教育学)
平成 24(2012)年 4月	大阪大学大学院 人間科学研究科(博士課程) 入学(在学中)	

教 育 歴 ・ 職 歴

名 称	期 間	教育内容又は業務内容
沖縄県北谷町教育委員会文化課 文化課	平成 12年 4月～平成 13年 3月	埋蔵文化財発掘調査員(町内にある埋蔵文化財の発掘調査)
私立光の子幼児学園	平成 13年 8月～平成 14年 3月	幼稚園教諭(4歳児クラス副担任)
丸惣測量株式会社	平成 15年 9月～平成 18年 4月	測量士補(建築測量業務)
島津製作所航空事業部	平成 18年 4月～平成 20年 3月	翻訳技術者(Lockheed Martin 航空機のメンテナンス英文指示書の邦訳)
香川大学教育学部	平成 20年 6月～平成 22年 3月	TA(社会教育学に関する講義の補助)
高松市立田井幼稚園	平成 22年 4月～平成 23年 3月	幼稚園教諭(5歳児クラス担任)
愛媛女子短期大学	平成 23年 4月～平成 24年 3月	専任講師(「教育原理」、「保育者論」などを担当)
大阪大学大学院人間科学研究科	平成 25年 1月～平成 26年 2月	RA(保育者へのインタビュー調査に従事)
箕面市社会福祉協議会	平成 26年 4月～平成 26年 8月	学童保育指導員(箕面市立小学校における学童保育)
社団法人日本品質保証機構(JQA)	平成 26年 9月～平成 27年 3月	評価系技術者(家電製品の安全認証に関する試験担当)
Panasonic	平成 27年 9月～平成 28年 1月	評価系技術者(家電製品の安全認証に関する試験担当)
豊中市こども未来課	平成 28年 2月～平成 28年 3月	臨時保育教諭(豊中市立認定こども園における保育補助)
小田原短期大学	平成 28年 4月～現在	保育学科通信教育課程 講師

所 属 学 会 等

名 称	活動期間	活動内容(役職等の活動を含む)
日本社会教育学会	平成 20年 7月～平成 22年 5月	会員 第 11 回中国四国地区社会教育研究集会(コメンテーター) 学会発表
日本教育哲学会	平成 20年 8月～現在	会員 学会発表
日本教育方法学会	平成 21年 1月～現在	会員 第 45 回研究大会(大会校準備係) 学会発表
日本保育学会	平成 22年 6月～現在	会員 学会発表
日本ミシェル・アンリ哲学会	平成 24年 4月～現在	会員 学会発表

日本教育カウンセリング学会	平成26年2月～現在	会員		
社 会 活 動 等				
名 称	活動期間	活 動 内 容		
生涯学習講座講師	平成24年2月	愛媛女子短期大学生涯学習公開講座の講師として、一般市民に向けて現象学をわかりやすく講和した。		
担当教科目に関する資格・免許等				
名 称	取得年月	取 得 機 関		
幼稚園教諭二種免許状	平成13年5月	沖縄県教育委員会		
小学校教諭専修免許状	平成22年3月	香川県教育委員会		
社会福祉主事任用資格	平成12年3月	明星大学		
児童指導員任用資格	平成12年3月	明星大学		
社会教育主事任用資格	平成22年3月	香川大学社会教育主事講座		
初級教育カウンセラー	平成25年8月	日本教育カウンセラー協会		
認定心理士	平成27年4月	日本心理学会		
研究実績に関する事項				
代表的な著書、論文等の名称	単著 共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1. 医療と教育	共著	平成25年3月	共同精版社	医療と教育に関する論稿「幼稚園教諭による子どもの健康への配慮」を担当(165-168頁)、本稿では、幼稚園教諭による登園時の子どもの健康に対するまなざしが医学的な「視診」の応用だけでなく、子ども達と日々過ごしている中で培われる内奥の他者への通路としての「感受性」に着目し、子どもの微細な変化を「違和感」として捉えていることを指摘した。(全頁数258頁、共著者：崎浜聡、嶋田健男、山森聖子、他23名)
(学術論文) 1. 瀬戸大橋の橋脚の島々の人々の生活と地域課題	共著	平成20年10月	『香川大学教育学部研究報告』(130号) pp.63-74	瀬戸大橋の橋脚の島々である与島、岩黒島、櫃石島の三島が瀬戸大橋の開通によって、島民の生活や教育福祉などがどのように変容したのかを質的な調査法を用いて調査した。特に、幼児教育に関しては、与島の幼稚園が閉鎖され、与島の子ども達は、送迎バスに乗って櫃石島の幼稚園に通園するようになり、離島として孤立していない状況を観察することができた。質的データの処理・分析を担当した。(共著者：渡邊安男、崎浜聡、渡邊友明)
2. 公民館からコミュニティセンターにかかわってからの諸課題(査読あり)	共著	平成21年3月	『香川大学教育学部研究報告』(131号) pp.51-64	香川大学の周囲の公民館が2006年度からコミュニティセンターに移行したことを受け、実態調査を行い、公民館との相違や課題を浮き彫りにすることを調査した。幼児教育に関しては、コミュニティセンターで行われている「育児・子育て支援事業」や地域の年配の方々と結成した通学路で子ども達を見守る「見守りた

<p>3.フィールドワークと質的研究の諸理論 (査読あり)</p>	<p>共著</p>	<p>平成 21 年 10 月</p>	<p>『香川大学教育学部研究報告』(132号) pp.59-80</p>	<p>い」等が活動していることを調査した。研究計画からインタビュー調査の実施、論文の構成を担当した。(共著者：渡邊安男、崎浜聡、渡邊友明)</p> <p>最近の質的研究として、パーソナル・ライフストーリー、質的調査法としての「エスノメソロジーの基礎理論」に関する論考を担当した。ここでは、質とは何か、ということを経験学的な視点から理解することの重要性が体験知と結びつけて考察した(72-73頁)。(共著者：渡邊安男、渡邊友明、崎浜聡、他2名)</p>
<p>4.教育のニヒリズムと超越論的現象学 (修士論文) (査読あり)</p>	<p>単著</p>	<p>平成 22 年 3 月</p>	<p>香川大学教育学研究科 pp.1-148</p>	<p>本論文の目的は、教育荒廃の根本要因と看做されるニヒリズムに教育実践者が直面した時に如何にして、新たな教育観を創出していけるのかについて考究することである。本論では、教育とニヒリズムの関係を歴史的、理論的に把握し、実際の状況を照らし合わせ、ニヒリズムの克服に関して和田修二を中心に考察した。結論では、ニヒリズムとの対決による思考の転回を支えているものが、他者への志向性(愛)であることを見出し、根本的な他者とかかわること自体が、教育的営為となることを提言した。</p>
<p>5.日本における音楽教育の根本問題の現象学的一考察 (査読なし)</p>	<p>単著</p>	<p>平成 24 年 3 月</p>	<p>『愛媛女子短期大学紀要』第 23 号 pp.30-40</p>	<p>本稿では、日本の音楽教育における陶冶の論理を明確にし、この論理の限界点を示すとともに人間の根本衝動と音楽活動が通底していることをM. シューラーの理論を援用しながら明示し、従来の音楽活動の意味を転換させることを目的とした。本論では、日本の音楽教育の成立状況を振り返り、その根本理論に人間中心主義と楽観主義を見出した。結論では、さらにこの理論が二元論的世界観に基づいていることを指摘し、二元論が抱える課題を一元論的世界観による世界の多様な現れによって、課題である二項対立構造を乗り越える方途として提言した。</p>
<p>6.現象学的教育実践から感受される教育荒廃の徴候 (査読なし)</p>	<p>単著</p>	<p>平成 24 年 3 月</p>	<p>『愛媛女子短期大学紀要』第 23 号 pp.41-50</p>	<p>本稿は、二元論的世界観に基づく教育観の実践に孕む二項対立の様相を捉える事を目的とする。本論では、和田修二が 1962 年に提唱した存在論的教育実践の構想を受け継ぎ、理論的補強を行い、より具体的な実践手法の在り方を提言した。これを踏まえ、幼児教育の現場で実践的研究を行い、二元論的教育状況に潜む二項対立原理による人間疎外の様相を記述した。</p>
<p>7.子どもの「魔的なるもの」と向き合う幼児教育実践 (査読なし)</p>	<p>単著</p>	<p>平成 24 年 3 月</p>	<p>『愛媛女子短期大学紀要』第 23 号 pp.51-60</p>	<p>本稿では、和田修二が 1962 年に提唱した存在論的教育の主題である「魔的なるもの」の克服を実際の幼児教育の現場で試みることを目的としている。本論では、存在論と超越論の領域を包括するまなざしによる現象学的態度によって幼児教育の場に身を置き、子どもの破壊的な欲望である「魔的なるもの」を顕現させ、これを抑えるのではなく、受け入れることによって、自身の善性を見つめ直す契機とする「覚醒」を引き起こす事を試みた。これにより、子どもの「魔的なるもの」は顕現されたが、当然ながら、その破壊性を直視することができず、他者の悪意へと転化する様相が観られた。</p>

<p>8.教育における現象学の課題と展望—ランゲフェルドにおける現象学批判を手引きに—(研究ノート)(査読なし)</p>	<p>単著</p>	<p>平成25年5月</p>	<p>『年報人間科学』第34号 pp.181-192</p>	<p>本稿では、ランゲフェルドは、還元を生活世界の次元までとする「制限」を設けた理由として、次のレベルの「超越論的主観性」という基盤の抽象性を批判し、その領域では「生きた子ども」を見つけることはできないことを挙げる。しかし、地平構造の生活世界での子どもの存在は、見られた存在であり、対象化された子どもである。対象化される以前の子どもと出会うには、内在の内奥に立ち入る必要がある。この方法論としてM. アンリの「生の現象学」に可能性があることを指摘した。</p>
<p>9. 現象学的教育実践における相互主観性の様相(査読あり)</p>	<p>単著</p>	<p>平成29年3月</p>	<p>『小田原短期大学』第47号 pp.181-192</p>	<p>本論文では、現象学的教育実践者と「生の世界」を共有する「保育者」や「園児」、「保護者」との関わり合いの中で「保育的世界」が生成され、共通理解へと止揚していく様相を捉えることが目的である。本論文では、現象学的教育実践の方法論および相互主観性について概説し、現象学的方法を用いて、保育的世界の生成を捉える手法を提起し、筆者の幼児教育の二つの実践事例を挙げて考察した。</p>
<p>10. 保育者養成課程のスクーリング「音楽表現」における弾き歌いを中心とした学習効果について</p>	<p>共著</p>	<p>平成29年3月</p>	<p>『小田原短期大学』第47号 pp.218-227</p>	<p>本論文では、「フォルマシオンミュージカル」(ソルフェージュの統合型学習法)に基づいた保育者養成課程の「音楽表現」の授業で援用し、その学習効果について統計的な方法で検証した。その結果、授業実践者4名の教授法に差がなかったため、その理由として、同一の学習方法を用いたためと解釈し、「フォルマシオンミュージカル」の効果を確証した。(共著者:小松原祥子, 福田明子, 木村文子, 萩原恵里, 崎浜聡)</p>
<p>(その他) (1) 学会発表 1. 地域教育の拠点としてのコミュニティセンター(査読なし)</p>	<p>共同</p>	<p>平成21年9月</p>	<p>日本社会教育学会第53回大会(於:大東文化大学)</p>	<p>香川県高松市と丸亀市のコミュニティセンターにおける「育児・子育て支援事業」を質的に調査し、両市を比較検討して、地域における育児・子育て支援のあり方を考察した。特に、丸亀市では、保育士と保健師が共同して実施している講座(センターで名称が異なる)があり、保護者が専門的なアドバイスを得られる場となっていることを浮き彫りにした。</p>
<p>2. 「わからなさ」への勇気(査読なし)</p>	<p>単独</p>	<p>平成21年9月</p>	<p>日本教育方法学会第45回大会(於:香川大学)</p>	<p>教育実践者が既存の教育観では理解できない状況に陥った時に、新たな状況理解の「枠組み」を必要とする。しかしながら、この「枠組み」は、すぐに動的な状況に当てはまらなくなる。つまり、状況の理解は、固定的な枠組みではすぐに破れてしまうのである。そこで教育実践者には、固定的な「枠組み」の知ではなく、流動的な状況に即した知の形態を受容する「わからなさ(不可知性)」を受け入れる実践的態度が重要であると提起した。</p>
<p>3. 教育のニヒリズムと超越論的現象学(査読なし)</p>	<p>単独</p>	<p>平成21年10月</p>	<p>日本教育哲学会第52回大会(於:名古屋大学)</p>	<p>教育のニヒリズム(対象化的思考)を克服しようとした和田修二は、ハイデガーの「思考の転回」によって、「存在への思考」へと還帰し、ティリッヒに依拠した「愛・力・正義」の三者が存立する教育的世界を提言したが、存在論に固執するあまりに実践的な「意欲」</p>

<p>4.現象学的教育実践から感受される教育荒廃の徴候 (査読なし)</p>	<p>単独</p>	<p>平成 22 年 10 月</p>	<p>日本教育方法学会第 46 回大会 (於：国士舘大学)</p>	<p>を主観性として排除してしまい、構想していた存在論的教育実践学が頓挫した。本研究では、存在論が排除した「超越論」を導入することによる存在論的・超越論的な多元的世界の開示が教育的世界にとって重要であることを主張した。</p> <p>和田修二の初期研究における存在論的教育実践の構想は、思考の転回が強い意志によってのみ実践されることの限界に直面し、子どもの存在を外に置いた存在論的教育実践の構想が挫折しました。しかし、子どもと大人の存在によって開示される「教育の地平」へと深く入り込む仕方を現象学や存在論に依拠することは有意義です。そこで、本稿では、現象学的手法を用いた実践的態度で教育の地平へと入り込み、この地平の生成の外部が強引に入り込む様を感受することによって、地平の生成に対する超越的な意味付与というズレを明らかにしようと試みた。</p>
<p>5.現象学的教育実践における共同主観的還元 (査読なし)</p>	<p>単独</p>	<p>平成 23 年 5 月</p>	<p>日本保育学会第 64 回大会 (於：玉川大学)</p>	<p>本研究では、一元論的世界観を基盤とした教育実践を実際の幼児教育の現場で実践し、周囲の人々を人間的な二元論的世界観から現象的な一元論的世界観へと誘う(巻き込む)「共同主観的還元」の在り方について考究した。事例研究では、現象学的次元で開かれた地平に教師や保護者、子どもたちが「繋がっていく」様子を捉え、自我の範疇では予測できなかった世界の現れが生起した。これによって、子どもや教師の新たな世界の拡がり方、在り方が開かれたと結論付けた。</p>
<p>6.保育実践における「生きたことば」 (査読なし)</p>	<p>単独</p>	<p>平成 24 年 12 月</p>	<p>日本乳幼児教育学会第 22 回大会 (於：武庫川女子大学)</p>	<p>本稿では、沖縄県内で勤める保育士や幼稚園教諭にインタビュー調査を行い、その語りから「生きたことば」を見出すことを試みた。事例では、男性保育士で勤務年数 13 年の B さんを挙げ、保育士になるまでの「迷い」や保育士を続けていくことの「苦悩」が、「浮気心」や「日々の難儀さ」という言葉で語られ、まさに保育することを生きる中で生み出された「生きたことば」であった。今後の課題としては、今回御調査では詳述されなかった「日々の難儀さ」やその乗り越えのプロセスの語り聞くための追加調査の必要性を挙げた。</p>
<p>7.生の現象学と教育 (査読あり)</p>	<p>単独</p>	<p>平成 25 年 5 月</p>	<p>日本ミシェル・アンリ哲学会第五回研究大会 (於：関西学院大学)</p>	<p>本稿の研究目的は、アンリの「見えるものから見えないものへ」の転換を教育学において展開する一つとして、教師の教育実践技法である「教育的タクト」に着目して、既存の教育的タクト論からの脱却と生の現象学による新たな教育的タクト論の構想を試みることである。本論では、近年の教育的タクト論の碩学として知られるマーネンの研究を取り上げ、既存の教育的タクト論が抱える問題をアンリの生の現象学の視点から浮き彫りにした。そして、マーネンでは反省の主題にならなかった「直接明示するもの」としての「教育的タクト」の様相を、論者の実践事例から分析し、「見えないもの」としての「タクト」の特性を明らかにした。</p>
<p>8.一人遊びの本質分析</p>	<p>単独</p>	<p>平成 25 年 10 月</p>	<p>日本教育哲学会第 56 回大会 (於：神戸)</p>	<p>本研究の目的は、一人遊びについて、行為者にとっての意義とは何か、を明らかにすることである。本論で</p>

<p>(査読なし)</p> <p>9. 和田修二の初期研究における存在論的根本問題とその乗り越え (査読なし)</p>	<p>単独</p>	<p>平成 27 年 10 月</p>	<p>親和女子大学)</p> <p>日本教育哲学会第 58 回大会 (於: 奈良女子大学)</p>	<p>は、発表者が保育園児の一人遊びへと参入し、遊びの主体として理解する実践的な試みは、失敗してしまう。この事例の現象学的分析では、一人遊びの主体が一人称に限られるのは、一人遊びが固有性に関わっているからと考え、この固有性を与えているものが、有限的な身体を越えた空想的な世界での無限性であると分析し、一人遊びが空想的な世界を所有することによる有限性 (現在) から無限性 (未来) への眺躍の場であり、固有の関心、願望や未来への投影が先取的に経験可能になること等を見出した。</p> <p>和田修二は初期研究において、教育荒廃の現象を「ニヒリズム」として捉えた。そして、このニヒリズムの根本要因を存在の「現われ」と「無化」の二つの相反する存在論的構造に見出した。しかし、ハイデガー存在論を踏襲したこの存在論的構造は、客観 (超越) から主観 (内在) を基づけるという立場を取るが、アンリは、「見えるもの」(客観) の地平である「超越」が、「見えないもの」(主観) の地平である「内在」を基づけることはできない、と批判する。よって、和田がニヒリズムの克服の方途として挙げた「対象化的思考」から「存在の思考」への転回は、アンリの視点から捉え直すと、「見えるもの」から「見えないもの」への転回となる。本発表では、和田がニヒリズムの起源と看做した存在論的構造について、アンリの提起する「普遍的存在論」の視点から再考し、ニヒリズムを克服する新たな思考の転回について論じた。</p>
<p>その他 (表彰等)</p>	<p>平成 22 年 5 月</p>	<p>日本学生支援機構「平成 21 年度第一種奨学金全額免除認定証」授与</p>		